

修士論文作成の手引き

国際関係論専攻 2008 年 5 月

以下の手引き改訂版は、修士論文執筆の最終段階にある院生のために作成したものです。文献の表記の仕方については、何種類もあり、以下で示すのはほんの一例にすぎません。大切なことは、我流の表記をすることを避け、一つの表記方法で一貫性をもたせることです。各自の指導教授とよく相談して、読み応えのある修士論文を書いてください。

1. 修士論文を提出しようとする者は、第2年次の履修登録最終日までに、「修士論文提出（予備）届」を専攻主任および指導教授に提出しなければならない。論文の主題、構成、内容については、指導教授の指導を十分に受け、承諾を得ておくこと。尚、4月の履修登録の際、忘れずに修士論文登録をすること。

2. 修士論文の提出期限、提出先、規格、部数等に関しては、「上智大学大学院履修要綱」を参照すること。

[期限] 専攻事務に確認すること

[提出先] ①提出票——学事局学事センター

②修士論文+採点票——国際関係論専攻事務

(2-823 大学院事務室)

[規格・部数] A4横書。3部。1部ずつダブル・クリップで留め、専攻指定の封筒（12月初旬から専攻事務室2-823にて配布）に入れること。提出論文には必ずタイトル・ページを付け、そのコピーをそれぞれ封筒の表にも貼り付けること。

提出された修士論文は、審査の後誤字脱字など必要箇所を修正し1部を提出する。学事センターにて製本され中央図書館に収蔵される。なお、指導教授以外に2名の教員が副査として論文を読み、場合によっては、詳細なコメントとともに論文を返却するので、後日、出版する場合には、それらも十分に考慮に入れて修正作業を行うこと。

3. 論文の書き方についてはさまざまなハンドブックが出版されている。英語のハンドブックは、日本語で論文を執筆するときにも参考になる。

《主なハンドブック》

*齊藤孝『学術論文の技法 新版』日本エディタースクール出版部、2005年。

*澤田昭夫『論文の書き方』講談社学術文庫、1977年。

*新堀 聡『評価される博士・修士卒業論文の書き方考え方』同文館出版、2006年。

**The Chicago Manual of Style*. The University of Chicago Press.

*Strunk, William and E.B. White. 2000. *The Elements of style*. Fourth Edition. New York: Longman.

*Gibaldi, Joseph. 2003. *MLA handbook for writers of research papers*. Sixth Edition. New York: The Modern Language Association of America.

4. 論文の長さ

修士論文の長さは、40,000字程度とする（注と参考文献リストを除く）。ただし、これはあくまでも目安である。A4版1枚は1,200字とする。

5. 論文の体裁

修士論文は、表紙、目次、序論、論文の本体、結論、文献リストから成る。序論以下、各ページにページ数を入れるのを忘れないこと。

表紙（タイトルページ）には、トップに●●●●年度学位論文、次に論文タイトル、学籍番号、氏名、指導教員名を明記する。

目次は論文全体の構成がわかりやすいように作成すること。

6. 引用

剽窃・盗用（plagiarism）をしないよう細心の注意を払い、引用箇所には注をつけ、出典を明記すること。直接引用の場合、引用文が短い場合は引用符つきで本文中に挿入し、長い場合は本文と明確に区別するために、一行スペースをあけ、また二文字下げて引用符（「」）なしで書く。（旧版手引きの2ページ参照）正確な引用になっているかを再度チェックする。不必要に長い直接引用は避ける。引用以外に、ある本や論文の内容を要約したり、自分

の言葉で言い換えたりすることもある。この場合も注をつけて出典を明記すること。いずれの場合も、引用とは、自分の議論を補強するために行うものであり、何のために引用しているのかわからないような引用の仕方は避けること。

また、盗用するつもりがなくても、知らず知らずのうちに盗用が生じてしまうことが十分にありうる。上記3.に掲げた**MLA Handbook**の75頁には、ウェブサイトで見つけたテキストをそのままカットアンドペーストしてしまう例をはじめ、誰かの本や論文を読んでいて自分の言葉での言い換えや要約をノートに書きとめておいて、あとでそれをそのまま何の注釈もつけずに使ってしまう例などがあげられている。これは盗用するつもりがなくても、正確なフレーズや引用箇所をノートにとっておかなかつたために結果として盗用が生じてしまうことを示している。誰かの独創的なアイデアやフレーズなどをそのまま注をつけずに使ってしまうことも盗用に相当するので、実際問題としては非常に微妙な形で**plagiarism**が生じてしまうことを念頭におくべきである。

7. 注

脚注(**footnote**)、巻末の注(**endnote**)いずれでも可。本や論文のタイトル、出版社、出版年や該当箇所を注にすべて書くのは煩雑なので、文献リストをしっかりと作成すること。たとえば吉川先生の『国際安全保障論』という本から引用した場合に、すでに作成した文献リストの中にこの本があがっていれば、注では、吉川(2007) 50頁、というように書くだけで済ますことができる。

8. 文献リスト

邦語文献・論文は著者名の50音順、英語(外国語)文献・論文は著者名のアルファベット順とする。なお、注や文献リストの表記の仕方は、複数ある。以下に掲げるのはその中のひとつ(**Chicago Manual of Style**に示されている何通りかある表記方法のうち、社会科学の分野で用いられる表記を記した)であり、他の表記方法をとってもかまわないが、自分の論文の中で一貫していることが重要である。きちんとした文献リストを作成することによって、注での記載が簡潔になるというメリットがあることはすでに7. で述べた通りである。

【日本語文献の場合】ここではシカゴマニュアル方式に従った表記の例をあげる。

《単行本》

吉川元. 2007. 『国際安全保障論』 有斐閣.

注でこの本からの引用であることを示す場合⇒吉川(2007),50-55頁.

《学術雑誌論文》

岸川毅. 2002. 「メキシコPRI体制の『静かな移行』と政治社会の再編」 日本国際政治学会編『国際政治』131号: 16-32.

これを引用し、注で出典を示す場合⇒岸川(2002),18頁.

《編著本》

鹿又伸夫、野宮大志郎、長谷川計二編. 2001. 『質的比較分析』 ミネルヴァ書房.

この中に収められている論文の表記は⇒

野宮大志郎. 2001. 「民衆の反乱と社会変動—歴史データの応用」 鹿又伸夫、野宮大志郎、長谷川計二編. 2001. 『質的比較分析』 ミネルヴァ書房.

これを引用し、注で出典を示す場合⇒

鹿又・野宮・長谷川編 (2001) 、3頁。あるいは、野宮(2001年)、3頁。

《翻訳書》翻訳書ではなく、原典を読むべきであるが、翻訳書を使用した場合の表記方法として、旧手引の内容をそのまま掲げておく。

ダニエル・ベル編, 齊藤真・泉昌一訳『保守と反動』(Daniel Bell ed. *The American Rights*. New York: Criterion Books, 1955.) みすず書房、1958年。⇒注で出典を示す場合、ダニエル・ベル編 (1958) , 25頁.

ルシアン・W・パイ「新興諸国の形成」(I・デ・ソラ・プール編、内山秀夫ほか訳『現代政治学の思想と方法』(Ithiel de Sola pool ed., *Contemporary Political Science: Toward Empirical Theory*, New York: McGraw-Hill, 1967) 勁草書房、1970年。注で出典を示す場合⇒ルシアン・W・パイ (1970) 、285頁。

【英語 (外国語) の文献の場合】

《単行本》

Calder, Kent. 1988. *Crisis and compensation: Public policy and political stability in Japan*. Princeton: Princeton University Press.

⇒引用する場合、Calder (1988), p. 15.

《共編著》

Greenberger, Martin, Julius Aronofsky, James L. McKenney, and William F. Massy, eds. 1974. *Networks for research and education: Sharing of computer and information resources nationwide*. Cambridge: MIT Press.

⇒引用する場合、Greenberger, et. al., eds. (1974), p. 30.

《(共著)論文》 雑誌名は斜字体で書き、巻数、号数、ページ数を示す。

Alesina, Alberto, and Roberto Perotti. 1997. Fiscal adjustments in OECD countries: Composition and macroeconomic effects. *IMF Staff Papers* 44 (2):210-48. (雑誌の巻数、号数がある場合)

⇒引用する場合、Alesina and Perotti (1997), pp.210-212.

Borrelli, Stephen A., and Terry J. Boyed. 1995. Government 'strength' and budget deficits in advanced democracies. *European Journal of Political Research* 28: 225-60. (雑誌の巻数のみしかない場合)

⇒引用する場合、Borrelli and Boyed (1995), p.246.

《編著本におさめられた論文》

Cameron, David. 2001. Unemployment, job creation, and economic and monetary union. In *Unemployment in the new Europe*, Ed. Nancy Bermeo, 7-51. Cambridge: Cambridge University Press.

⇒引用する場合、Cameron (2001), pp.13-16

9. インターネットからの引用について

インターネット上の情報の引用については、MLA Handbook 第六版の208ページ以下が参考になるので以下で紹介する。

例1 Ross, Don. "Game Theory." 11 Sept. 2001. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Ed. Edward N. Zalta. Fall 2002 ed. Center for the Study of Language and Information, Stanford University. 1 Oct. 2002 <<http://plato.stanford.edu/entries/game-theory/>>

著者名、論文タイトル、論文が書かれた年、出典、編者名、何年版

であるか、ウェブサイトのタイトル、アクセス日、URLなどの情報が含まれている。

例2 “City Profile: San Francisco.” CNN.com. 2002. Cable News Network. 14 May 2002 <<http://www.cnn.com/TRAVEL/atevo/city/SanFrancisco/intro.html>>

報道記事のタイトル、出典、最終更新情報、ウェブサイトのタイトル、アクセス日時、URLが含まれている。

10. 新聞雑誌など

新聞記事の場合は、『朝日新聞』2004. 10. 15 朝刊というように書く。必要であれば、第○版、○○県版、○面などの情報を付け加える。

アメリカの全国紙の場合は次のようにする。

David Rogers. “Intraparty Feuds Dog Democrats, Stall Congress.” WSJ.com. 2007. Wall Street Journal. 13 Dec. 2007. <http://online.wsj.com/article/SB119750838630225395.html?mod=world_news_whats_news>

11. 論文の書き方について

修士論文は博士前期課程で学び、研究したことの集大成であり、初めての学術論文である。自分なりの研究テーマを設定し、それについて十分なりサーチを行い、適切な結論を導きだせたか、ということが問われる。

(1) 序論

序論では、先行研究の整理を行い、先行研究では十分に明らかにされてこなかった問題点を指摘し、自分の問題設定の意義をそれに照らし合わせて明確に示す。どのような問い・仮説をたてたのか、答えが出せるような問い・仮説となっているかを明確に示さなければならない。要するに、この論文を書く目的が抽象的な、あるいは漠然とした形ではなく、できる限り具体的に明確に述べられていることが重要である。総じて、読者の関心を強くひきつけるような、説得力ある書き方になっていることが大切である。さらに序論には、論文が引き出すはずの結論が述べられていなければならない。あらかじめ論文の到達点を示すことによって、どこに連れて行かれるかわからないという不安を読者に抱かせない（＝読むのをあきらめさせない）ですむからである。さらに道標として、以下で展開する章だて（論文のアウトライン）を明確に示すことも大切である。

英語の学術論文の例を示しながら、もう少し説明を加えてみる。Andrew Kydd と Barbara Walter の共著論文である *The Strategies of Terrorism* が *International Security* の2006年夏の号に掲載されている。7段落からなる序論部分は次のように展開されている。(Kydd, Andrew H. and Barbara F. Walter. 2006. *The Strategies of Terrorism*. *International Security* 31(1): 49-80.)

The terrorism often worksという書き出しは、簡潔であるがゆえに読者の注意をひきつけるものとなっている。論文の書き出しは読者の心をつかむものでなければならず、この論文はその点で成功をおさめていると思われる。続く第2段落では、学者も政策担当者もどのようにして、また、なぜテロリズムが大きな効果をもつのかについて、ようやく理解しはじめたところであるという現状が述べられている。第3段落では、このような理解が深まらない限り、テロリズムに対する効果的な対抗戦略は構築しえないと続く。

”In this article we seek answers to four questions”という書き出しの第4段落は重要である。この段落で4つの問が示されているために、読者は、これから自分が読む内容をあらかじめ想定することができ、したがって、この論文が読むに値するか否かをこの時点で決めることができるのである。

続く第5段落では、自分たちの議論の中核になる事柄を明確に述べている。**The core of our argument is that terrorist violence is a form of costly signaling**という書き出しは、学術論文にはよくみかける決まった言い方のひとつであるが、これを読んだだけで、このあと続く長い論文の結論が見えてくる。読者はこの時点で、論文の到達点を与えられ、それによって安心して読み進めることができると感じるのである。次の第6段落も同様の趣旨で書かれている。

序論部分最後の第7段落では論文の構成が示されている。**The article is divided into two main sections. The first discusses.....The second section develops.....**と続くが、これは到達点に読者がたどり着くまでに通る道筋であり、道標である。読者はこれを頭にいれてはじめて、論文を読み進めていくことができる。修士論文の序論においても、第一章では、第二章では・・・というように全体の概略をあらかじめ示しておくべきである。

以上で述べたことは、論文を書く際の一種の決まりきった型である。こうした型にそって自分の議論を組み立てることによって、最初の段階では錯綜していた議論も、次第にすっきりするのではないだろうか。なお、序論は最初から完璧なものを書こうとするとなかなか先へ進めないのも、ラフなものを作っておいて最

後に仕上げることにしたほうがよい。特に修士論文は時間との戦いなので、効率的に作業をすすめることが重要である。

パラグラフに関して注意すべき点を強調しておきたい。パラグラフとは意味のあるひとつのまとまりである。それぞれのパラグラフにはポイントがひとつ含まれなければならない、通常パラグラフの最初のセンテンスがそれにあたる。ひとつのパラグラフの中に複数のポイントがあってはならない。またワンセンテンスでワンパラグラフのような論文を見かけることがあるが、これは論文の構造そのものがないに等しい。前掲Kydd-Walters論文あるいは各自が参考文献として重要であると考えている論文を参照し、パラグラフがどのようなものであるかを理解してほしい。パラグラフどうしには当然論理的なつながりがなくてはならない。

(2) 論文の本体

論文の本体では、序論でしめしたアウトラインに従って議論が進められていかなければならない。また、序論で示した仮説が検証されていなければならない。特に気をつけなければならないことは、不必要な繰り返しがどうかということである。議論がredundantであってはならない。また、証拠として用いたデータが本当に自分の議論を支えるものとなっているかということも重要である。表やグラフを用いた場合は、それらが本当に必要か、自分の議論を支えるものとして適切かといったことにも注意を払う必要がある。

(3) 結論

結論では、自分の論文の結論を示し、それが事実、データで裏付けられていることを明確に述べる。物の書き方は人それぞれであるが、基本は読者とのコミュニケーションであり、読者が書き手の議論を理解することが重要である。そのためには、凝った言い回しや過度のレトリックによって文章の解釈をむずかしくし、読者にかかる負荷を大きくすることがあってはならない。明快に書くことを心がけるべきである。

(3) 結論

結論では、自分の論文の結論を示し、それが事実、データで裏付けられていることを明確に述べる。物の書き方は人それぞれであるが、基本は読者とのコミュニケーションであり、読者が書き手の議論を理解することが重要である。そのためには、凝った言い回しや過度のレトリックによって文章の解釈をむずかしくし、読者にかかる負荷を大きくすることがあってはならない。明快に書くことを心がけるべきである。